

よ、本書が古代世界における君主崇拜に関する必読書となることは間違いない。

阪本 浩(青山学院大学)

井上忠『パルメニデス』Pp. 368+30, 青土社 1996, 7,573 円。

鈴木照雄『パルメニデス哲学研究』Pp. xxviii+601, 東海大学出版会 1999,
10,000 円。

日本語のものとしては類書のなかったパルメニデス(以下、P. と略記)に関する本格的な註解・研究書である。井上氏のは、全著作断片の韻文訳、略註、ギリシア語原文が冒頭に置かれ、続く断片解釈(fr. 4, 5 は全詩篇の結語部分とし fr. 19 の後に定位。口語訳と既存研究の詳細な吟味批判を含む)が本論をなす。口語訳註解が本論の後に来る(fr. 6 と fr. 8, 6b-21 で注番号と註解文が対応していない箇所あり)。また著者独自の用語を交えた論述の俯瞰のための便宜として論考「口説きと運命」が収録されている。他方、鈴木氏の著書は、第1部が序章、第2部が「パルメニデス哲学における「ある」、その主語、「あるもの(こと)」」という論考、第3部が「断片と解釈」(fr. 2-fr. 8, 51a の翻訳、原文、引用文脈の翻訳、註解で構成)。井上氏と異なり、fr. 1 と「思わくの部」が検討対象外なのが残念。両書の性格は比較することが意味を持たない程に異なり、二人が描き出す P. も著しくその相貌を異にするが、にもかかわらず(あるいは、それだからこそ)これらは日本での P. 研究の深化に向けて良い刺激となるだろう。

まずは井上氏の『パルメニデス』。著者は、叙事詩的伝統の中で解釈されがちだった「序曲」(fr. 1)が、P. による叙事詩言語の探究言語への改鑄作業を通じて、日常世界を方法としてのアーテーにより無化し(わたし)を真理のくにへ躍入させる天門開披という真理体験を語るもので、「探究」(事実地平の消去後に披ける(わたし)の(ところ)の天地で開始される)を性格付け「本曲」第一部(fr. 2-fr. 8, 51)への導入の役割を果たすものと見る。本曲第一部ではまず、探究の出発点として「(わたし)に立ち現われる主語なき「有り」が措定される。この時「有の道」が探究の道として(わたし)の(ところ)に披けるための跳躍板が、経験事実の全地平を無化する「無の道」である。著者は、あえてこの「有る」の主語の実質を問うなら「天門開披の衝撃」がこれに当たると言う。ただ、この「有り」は発語以前の事実としての何かが有ると(述べる)のではなく、「有り」の発語によって存在を「それ」として(立ち現われ)させるものである。著

者は P. の手法の主眼を、われわれが事実を実在として〈擱む〉言語機能に対して、〈わたし〉への〈立ち現われ〉の言語機能をはるかに根本のものとする道をひらいた点に求める。この「有り」は、続く「有の道」の道標の提示の中で、独自の論理語法を通じて次第に新しい主語性の存在（「有るもの」）としてその全貌を露わにしてくる。著者によると、P. の論究は、まず生成消滅の事実地平を拒否し、〈わたし〉の言語宇宙、すなわち「思い」の披けを証言し、新宇宙が「有る」だけで充満する「限られた」世界であることが証示されるが(fr. 8, 6b-33), 続いて〈わたし〉のこの「思い」の披けのうちに〈立ち現われ〉てくるもの、この「思い」がそれに向かう目標が、実は当の「思い」を成立させている根拠であることが開示される(fr. 8, 34-36a)。それはまさに、「思い」としての〈わたし〉とその〈わたし〉の根拠との同一、その意味での究極の「自己同一」を示すものである。そしてこの「思い」に先立つ根拠が「有るもの」(「存在」)そのものである。日常地平の崩落、真理顕現の体験を、厳密な探究言語によって根拠への「道」として確認した後に、P. はその立場から根拠に目覚めぬ「死すべきものどもの思い込み」つまり「学説」風の世界像を描いてみせる。それが本曲第二部「思い込みの道」である。

本書の特徴は何と言ってもその独自の言語機構分析に基づく解釈にある。しかし、その分析手法によって詩語の意味範囲が大胆に拡張され、結果として人工的で強引な原文解釈が見られるところがある。例えば P. の「言語改鑄手法」の真骨頂を示すとされる fr. 1, 3b の *κατὰ πάντ' ἄτηι* (写本を保持する方向での著者固有の読み) は、「この世のことはなにもかも、〈こころ〉を襲う暗闇に消え去らせつつ」と訳されるが、下線部はどう見てもこの三語から直接出てくるものではない。たとえ文脈を考慮してもこの補いは語法上無理がある。またこれも重要な主張だが、著者によると〈こころ〉という独立領域を現成させる「無の道」による事実地平の無化は、「わたしから発せられた言葉によって惹き起こされた (*ἐξ ἐμέθεν ῥηθέντα*) 争い倦まぬ駁論」(fr. 7, 5-6) を有無の判別に委ね「無し」と判決することであり、この「駁論」は「わたし=女神」の言葉でなく死すべき者たちからの反発であって「思い込みの道」とされる。だが *ῥηθέντα* の含意する語りの主体は語法からして女神以外にはない。「惹き起こされた」という微妙な補訳で、この主体が女神から死すべき者に入れ替わっている。駁論発生の起点は女神だが駁論するのは死すべき者となるわけであるが、やはりこれも不自然で、「わたしから語られた」としか訳せない。また、「思い込み」を「無」とする判決は fr. 8, 16 の「判決は下されている」と呼応しているとき

れるが、そこは「思い込み」ではなく、著者の言葉を藉りれば「真理の披け」の有無についての判決であり、また、事実地平の無化はむしろ「無の無化」を伴う「有の道」によるのであり「無の道」によるとは言えないのではないか。その他、〈こころ〉の主体である「わたし」が、固有独自の言語空間としての〈わたし〉という自己に転位するというが、そのような「自己」の概念はテキスト上に明確な根拠をもって確立されていると言えるのか(fr. 1, 1の *θυμός* だけでは不十分で、転位に際しての「口説きの秘儀」なるものも十全な根拠になっているとは思えない)。また、*νοεῖν* も *δοκεῖν* も等しく「〈こころ〉に立ち現われる」と解することに問題はないか。様々な疑問が消えずに残る。著者による言語機構分析の徹底には感銘すら覚えるが、この手法でなければ P. が解釈できないのかという点で評者はまだ納得できないでいる。

次は鈴木氏の『パルメニデス哲学研究』。著者は P. の哲学詩の第一部を認識方法論(=メタ探究的探究)(fr. 2-7)と存在論(fr. 8)に二分した上で、P. 哲学の原点である「ある」(fr. 2, 3)は、真理認識のための探究の核をなす「『何であるか』の問い」とそれへの答えに内包され、それらを成立させている骨格・表現形式の核ともいべきものだとする。よって、「ある」を存在と見る立場はこの問いに答えられないものとして採用されず、むしろ著者は、「存在の『ある』」と「真理表示・述語的『ある』」が対等な論理的・事態的重みをもって併存しているという立場を採る(「xはYとして(真に)存在する」)。そしてこの二つの意味価の内、存在的意味価がエレア派・多元論者等の哲学に、そして本質説明的意味価がプラトンのイデア論にそれぞれ決定的な影響を与えたとする。この解釈が受容されるためにはまず、*εἶναι* 自体がこれらの意味を本来的かつ明示的に表示しうるものでなければならない。しかし、かつて Kahn に対して寄せられた批判に見られるように、「ある」の「真理表示性」自体が依然として大いに議論の余地のあるものである。そして探究の基本形を「何であるか」と見ることに疑問が残る。著者は、「『何か』の問い」はすでにその「何か」の存在を当然のものとして前提しており、直接的・一次的な有り様としての「ある」は真理表示の述語的「ある」であるが、fr. 8での「あるもの」の本質属性の演繹等との関係から、二次定式としての「～として存在する」がこれに取って代わると言う。しかし、一次・二次という区別や、前者が「存在」を含意するといった表記は、著者が批判する Kahn との違いを逆に解消することになりかねず、また、探究対象の存在を「当然のものとして前提」すること自体に反省を加えたのが P. であり、その限りでは、むしろ存在の意味価の方が「一次的」と

なってくるのではないか。「ある」の意味の測定は依然容易ではない。また著者は、上述の二分法に拠り、認識方法論における主語と存在論における主語とを区別し、fr. 2 の「ある」(絶対用法で主語は非表示)の論理的主語は、何であるかの本質定義が問われるその「何」であるところの探究の対象であり、ここでの探究が初期ギリシア自然哲学の探究である以上、主語はこの世界並びにそれを構成する万物ということになるとし、他方 fr. 8 での主語 $\tau\acute{o} \acute{\epsilon}\acute{o}\nu$ は、「ある」そのものが実詞化された、 $\acute{\omega}\varsigma \acute{\epsilon}\sigma\tau\iota\nu$ と実質等価のもので、「こと」の方に重点を置いた「あること」と訳すべきものと主張する。この主張は、P. を過激な一元論者としめない点と合わせ傾聴に値する。また「ある」の時間性については、それが真理なら「無時間的」であることは自明のように見えるが、それに「今」(fr. 8, 5: $\nu\acute{\upsilon}\nu$) という副詞が付いていることから、問題は複雑になる。著者の結論としては、生・滅、過・未から超絶した根源的な「ある」に属する「現在」としての「今」は時間内のものではありえず、むしろ「現存在」たる「ある」の言わば「場」としての不動なる超時間的永遠の「今」となる。このような洗練された「今」が果たして P. に認められるか否かは、まだ議論の余地がありそうである。外語表記にかなりの誤植が見られるが、原文批判や先行研究の検討など詳細精緻を極めており、情報量も豊富で、問題の在処や P. 研究の現況を見通すのにも非常に有益である。

三 浦 要(金沢大学)

H. H. Benson, *Socratic Wisdom: The Model of Knowledge in Plato's Early Dialogues*. Pp. ix+292, Oxford UP 2000, \$ 55.00.

本書のねらいは、プラトン初期対話篇に描かれるソクラテスの知のモデルの導出にある。全般に Vlastos の研究が意識されていることは、序文での回顧に示されている。彼のいくつかの論点に対して批判に取りかかっていた当時の Benson は、しかし 1988 年夏、彼のセミナーに参加するや、その包括的な初期対話篇解釈の美しさと整合性を評価しはじめ、ただちにこう思い至る。Vlastos 批判の成功のためには自身の側にも「包括的解釈」による裏づけが必要である、と。「包括的解釈の強力さはむしろ批判の強力さに依存しようけれども、ひるがえってまた、批判の強力さは包括的解釈の強力さに依存するだろう」(vii)。本書は、爾来見据えられた道りの到達点を示すものである。既発表の諸論考をもとにしながらそれらすべてに大なり小なり手が加えられ、さらに書